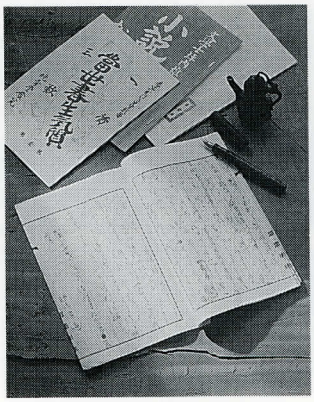
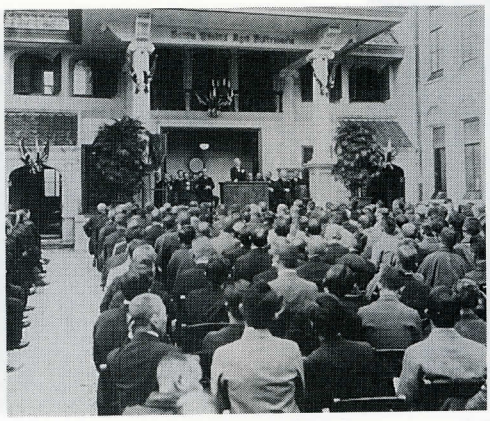

自筆原稿と遺品


演劇博物館開館式

明治18年の逍遙

第七章 人物

1 坪内逍遙

明治・大正・昭和の時代に教育、文学、演劇の世界で活躍し多大な功績を残した坪内逍遙は、安政六年（一八五九）五月二二日、太田代官所の手代であった坪内平右衛門の一〇人兄姉の末っ子として生まれました。

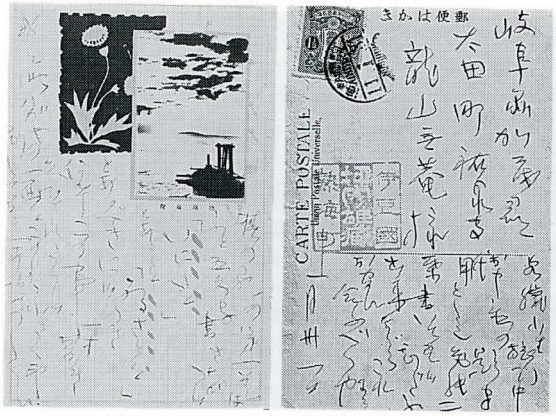
幼少のころは、人物や動物を描いて色を塗ったり、神社の境内にあった椿の実で遊んだりしていました。大正八年、六一歳のときに太田へ訪れた折りには、子どものころを懐かしんだ歌を詠んでいます。また、蜂屋小学校校歌の作詞も手がけています。

明治二年（一八六九）十一歳のとき、一家は名古屋郊外へ住まいを移しました。逍遙は大惣（大野屋惣八）という貸本屋へ通ったり、母や姉の影響で観劇をしたりして、明治という時代の文化の風を受けました。

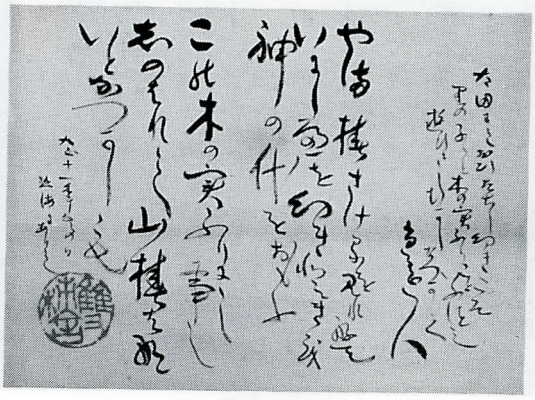
明治五年には愛知英語学校に入学し、そこで教師レーザムのジェスチャー入りの朗読法を学んだりマックレランからシェークスピヤの講義を受けました。逍遙とシェークスピヤとの出会いがすでにありました。

明治九年、愛知県の選抜生として上京し、東京開成学校（東京大学の前身）に入学しました。同校を卒業すると、東京専門学校（現早稲田大学）の講師となり、外国史、憲法論を担当しました。のち（明治二九年）には早稲田中学（現在の早稲田高等学校・中学校）の創設に参加し、教頭（後に校長）として開校に協力しました。教育者逍遙は、修身と英語を担当し、なかでも修身は教科書による羅列的なものではなく、具体的な例を挙げて、「思いやり」の心を養う教育を実践しました。

明治一八年、近代小説の理論書である『小説神髄』を刊行しました。この書は、江戸時代からの勧善懲悪主義を捨て、人間の内部を写実的に描写し、芸術としての価値を高めたものです。同年、逍遙は『小説神髄』の実践書である『当世書生気質』を刊行しました。これは当時の学生の生きざまを写実的に描写した小説として世の賞賛を受け、逍遙の名は一挙にあがりました。



（裏）　祐泉寺へ宛てたはがき　（表）



逍遙の歌

明治二〇年ごろから、逍遙は演劇改良に向けて意欲を燃やし始め、演劇に対する理論の研究と実践書である幾つかの脚本を完成させました。舞踊劇の理論書『新楽劇論』や『桐一葉』『沓手鳥孤城落月』などの史劇をつぎつぎと発表しました。

明治二三年、早稲田大学に文学科が設立されると、逍遙はシェークスピヤをはじめ、英文学や欧米劇作家の研究、講義をしました。逍遙がシェークスピヤの文学的影響を受けたのは明治一四、五年のころからで、それまでの東洋文学とは異なることに大きな驚嘆を覚えたことがきっかけとなりました。逍遙は日本ではじめての逐次訳『自由太刀余波鋭鋒』（ジュリヤス・シーザー）を明治一七年に刊行して以来、翻訳と研究を続け、『ハムレット』『マクベス』などの翻訳をつぎつぎと手がけました。

明治三八年に設立された文芸協会は、明治四二年改組されて逍遙はその責任者となり、日本新劇運動の中心となりました。明治四四年、第二次文芸協会の第一回公演には、逍遙訳の『ハムレット』全幕が上演され好評を得ました。

逍遙が『シェークスピヤ全集』四〇巻の個人訳を完成させたのは昭和三年、七〇歳のときでした。さらに昭和八年には、現代語訳を目指した『新修シェークスピヤ全集』を刊行しました。これまでに個人訳の全集を完成させたのは逍遙をおいてほかになく、近代日本文学界の先駆的、革新的な役割を果たしたといえます。

昭和一〇年、かぜから気管支カタルを併発した逍遙は同年二月二八日、最愛の地、熱海で眠るようにこの世を去りました。墓地は逍遙の希望で、熱海の双柿舎に近い海蔵寺に造られました。

大正８年　太田虚空蔵堂前の逍遙夫妻